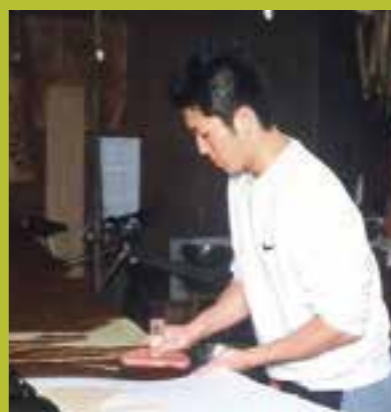


わたしの **新** 人時代

株式会社永勸染工場

染職人専務、永野仁輝さん

明治二十年から続く老舗で、 伝統の手ざわりや色合いの魅力、 染め物の新たな未来を発信



大学卒業後、永勸染工場の染め職人として修行に励んだ若き日の永野さん

遊び場だった染工場から眺めた
父や祖父、職人たちの働く背中

藩政時代から歴史の続く染め物の職人町、
仙台市若林区南染師町で営む染工場で、
祖父と父の仕事ぶりを幼い頃から見守って

きた株式会社永勸染工場の専務、永野さん。
よく工場を遊び場にしていたそうで、「特
別な家業だ」という意識はまったくありませ
んでしたが、職人としての祖父や父の姿は
誇らしかったですね」と回想します。現社
長の仁さんが4代目、仁輝さんが継げば5
代目を数え、創業120年以上という老舗
の重みを背負う永野さんですが、「子ども
の頃は、さすがに自分が跡を継ぐという強
い意志は持っていませんでしたが、仙台の

街中でうちの染工場が手がけたのれんを見
かけると、この仕事のやりがいみたいなの
を感じていました」と話します。

代々の家業を受け継ぎながら
新たなものづくりを目指す展望

高校を卒業後、千葉県にある大学に進学
し、実家を離れて寮生活を送った永野さん。
そこで出会った友人と将来について語り
合ったことが、以後の仕事観を決定づける
ターニングポイントになりました。「共に
寮生活をしていた、自分と同じ境遇の友達
と大学卒業後の未来について話し合ったん
ですが、ただイスに座って人任せに業務を
こなしていくのではなく、自分なりに何か
を発信できるものづくりができないか、と

いう明確な意志が生まれたんです」。その
友人とは、今も連絡を取り合う仲が続いて
いるそうです。

家に戻り、染め物職人として一から修行
をスタート。子どもの頃はやさしかった従
業員の職人たちは、時に厳しく永野さんを
指導しました。「ずっと仕事ぶりを見てき
たつもりでしたが、自分が職人として工場
に立つと分からないことばかりで、たく
さん失敗もしました。でもそれだけに、一
つひとつの作業の大切さや、この仕事の奥
深さを感じることができましたね」と永野
さん。また、社長と一緒に顧客の元を訪
ね、セールストークも習得。「お客様が
今、何を求めているのかを会話で推し量り、
その要望に応えることが重要だと知りまし

た」。職人として研鑽を積み重ね、老舗の
看板を背負う経営者として学ぶ日々のなか
で、現代のニーズに合った染め物の在り方
にも考えが及ぶようになります。その一つ
の答えが、インターネットを利用したオン
ライン上でのオリジナル暖簾の受注販売で
した。

染め職人の誇りと喜びを
新たな時代にも伝えるために

見積もりからデザイン提案、実制作、商
品の発送まで、ほぼ対面することなく受注
できるシステムを構築。これにより、販売
網を日本全国にまで広げました。「だから
といって熟練の染め職人が手がける質の高
さは変わりません。デザインや素材など求
められる要素が多様化しているので新しい
技術や若いスタッフを採用していますが、
お客様にとって、本当に喜んでいただける
ものづくりとは何かを考えることが第一で
すから」と、自信に満ちあふれた笑顔でそ
う語ります。

現在、小学1年生になる息子さんをもつ
永野さん。自分の跡を継いで欲しいです
かと聞くと、「これから成長していくなかで、
自分がしたいと思える職業を見つけてくれ
ればと思います。地域に根付いて仕
事ができる喜びを感じながら、職人の誇り
と新たな可能性の広がりを得られるこの
染め物の仕事を、大人になったらぜひ息子
にも味わって欲しいとも思っています」と、
目を細めていました。



法被の腰柄(こしがら)となる角
字の見本帖。50年以上前のもの
で、会社の倉庫で眠っていたもの
を探し出したそうです



手ぬぐいや法被などの古い図案見本。今見ても
斬新なものも多く、デザインを制作する際、
大いに参考にしている



もっと多くの人に染め物の良さを知ってもら
いたいと考え、2011年にショールームと
しても機能する店舗スペースを開業



株式会社永勸染工場

明治20年頃、初代・永野勸兵衛氏が創業。昭和20年の仙台大空襲で工場を焼失したため、現在の場所に拠点を移す。現社長・仁氏は4代目。昭和60年に仙台市より技能功労賞を受賞するなど、その技術は高く評価され、現在はネット受注販売にも力を入れている

所在地
仙台市若林区南染師町13
Tel 022-223-7054
Fax 022-223-9719
http://www.norenya.co.jp/

